

〒010-0875 秋田県秋田市千秋明徳町3-16

開館時間 9:00-21:00

休館日・火曜日(火曜が休日の場合はその翌日)

・12月29日-1月3日

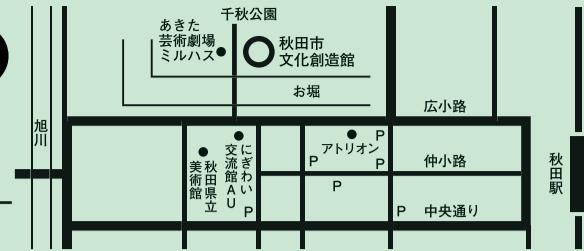
お問い合わせ Tel: 018-893-5656 Fax: 018-893-5659 e-mail: info@akitacc.jp

公式ウェブサイト <https://akitacc.jp>



そうする？ SO SURU?

3号 2022年10月



●アクセス: JR秋田駅西口から徒歩約10分
●駐車場はありませんので近隣の有料駐車場をご利用ください



PARK | いきとつくるのにわ

秋田に暮らす人々と、多様なクリエイターや専門家が交わり展開するプロジェクト。①「観察する」②「会う」③「育む」④「残す」4つのプログラムを通して、秋田の文化的土壤をたがやす試み。

8月13~25日、①「観察する」のために大阪から家族と共にやってきた、染色作家・安藤隆一郎さんの滞在記録です。

「ぼくの腕の長さは2.2にんじん」
「わたしの脚の長さは4パプリカ」
「あの子の頭から足の先まで6バターナツ！」

8/14(日曜)リサーチ初日。秋田市河辺の伏伸(ふのし)の滝へ寄り、仙北郡美郷町で「PARK」参加クリエイターでもある、わいないきょうこさんの手料理を森の中で。その後、美郷町歴史民俗博物館へ。



8/20(土曜)新屋獵友会のみなさん、秋田県立射撃場の佐藤恵次さんに山での過ごし方や、狩猟についてインタビュー。子どもの頃にカエルを丸呑み！していた体験談などをお聞きしました。写真は射止めた熊の歯のお守り。



8/19(金曜)油谷これくしょん→秋田県立博物館。安藤さんが以前から気になっていた木の岐(また)を中心リサーチ。あまり見たことがない雪べらなども。



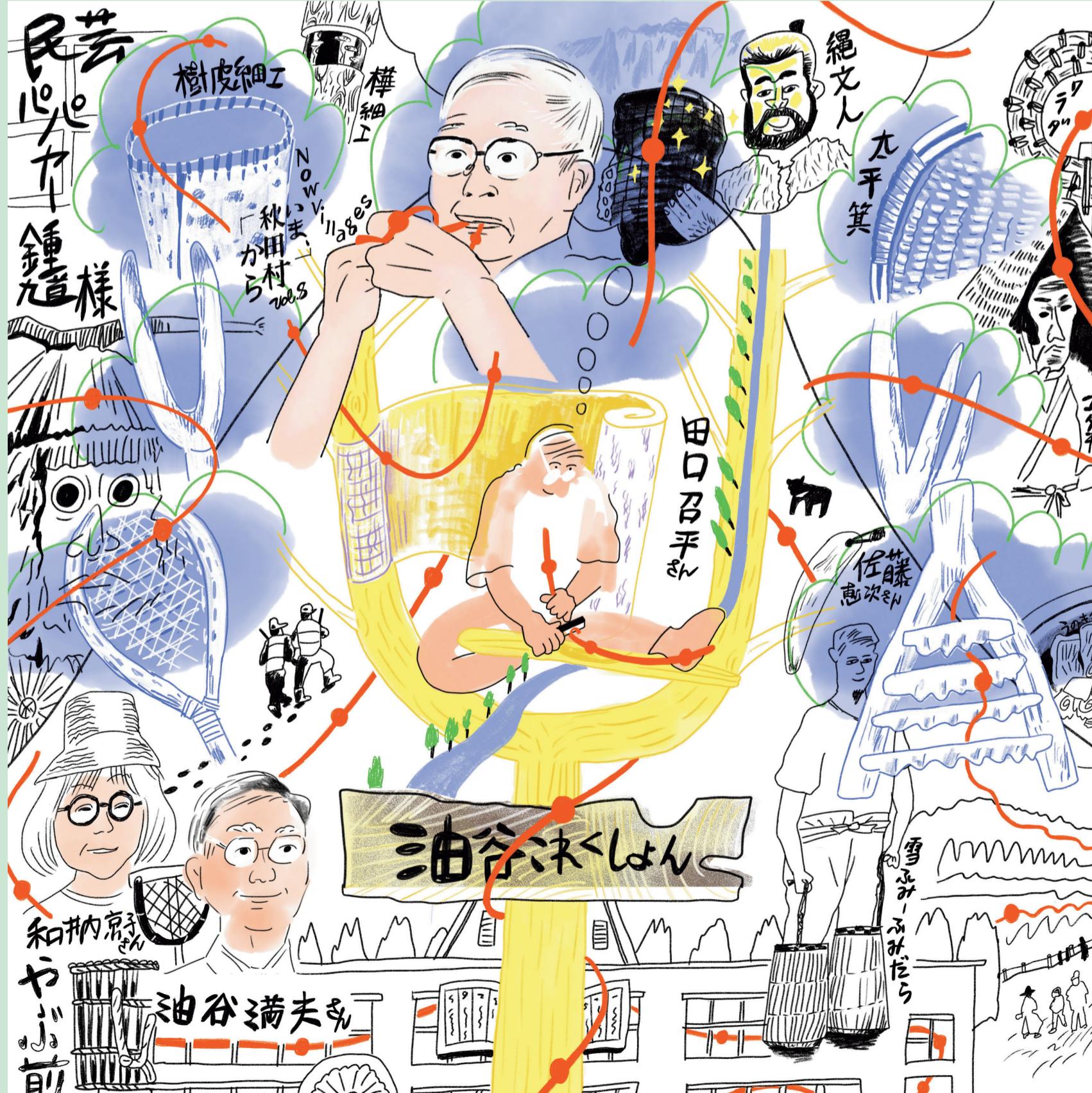
8/21(日曜)民芸パパヤーさんのお店にあった樹皮細工からつながり、太平簾(おえだらみ)職人の田口召平さんの作業場を訪問。午後には、マタギ資料館。



8/22(月曜)安藤さんが考案した「身体〇ベース運用法」によるワークショップ「野菜身体測定会」開催。野菜を使って身体測定をし、紙に野菜をスタンプして「実寸大の自分」の身体図を制作。身体を測るセンチやメートルを、身近な野菜に置き換えてみてことで、「からだ」をいつもとは違う見つけ方をする機会に。



写真: 山本美里(左4点)、坂口聖英(右2点)



かたちなき「感動」を求めて
絵・文: 安藤隆一郎さん(参加クリエイター)

「感動」という言葉を私たちは日常的に簡単に使う。山を見て、花を見て「感動した」という。太平簾(おえだらみ)職人の田口召平さんは「感動するということはそんなことではない。身震いするぐらいのものが本当の感動というもんだ。軽すぎるんだな。私も含めて今のは本当に感動という意味を分かってねえんだ。縄文人は遙か昔に今よりもよく自然のことを知っていて、籠にしても今よりも2倍3倍も緻密な物を作ったんだ」と言った。自ら山に入り、素材を採取して簾や樹皮細工を扱うつくり手として田口さんは縄文人の「感動」を想像する。

緑深い山。青く広い海。日本の豊かな自然に私たちは今どれほど「感動」を見出すことができるだろうか? その形は様々にあるが、私は秋田に存在する山や暮らしの様々な文化を「ものづくりの身体」の視点からそれを見つけると思う。自然に関わることで意識あるいは無意識に生まれる身体技法や感覚、思考。言葉で表すことができない、かたちのないもの。しかし、こういったものは直ぐには捉えることができない。狩猟にてもそこで起こっていることは同行し、時を過ごし、観察してみないと分からず。また、道具にしてもそのもの一つだけでは知ることができない。油谷満夫さん(油谷これくしょん館長)がありとあらゆるもの收集することで物の背景を紡ぐように、周辺や裏側まで手を伸ばさないといけない。油谷さんに見せてもらった「木の岐(また)」の民具。自然の形を活かし、人の手が馴染んだ美しき暮らしの道具。使うこと、作ること、いろんな視点で探っていくとそこにも必ず「感動」があると思う。

あんどう・りゅういちろう(染色作家)
1984年京都府生まれ、大阪府在住。「身体」と「もの」との関わりから生まれる感覚、運動、機能を「〇」から見直し、人間が本来持っている「身体」の運用法をアートを用いて探究する、「身体〇ベース運用法」を始動。2021年より京都府亀岡市を拠点に、不要民具を救出し、活用するプロジェクト「民具BANK」を立ち上げ、地域に伝わってきた「身体」を見出すことを試みている。

PARK—いきとつくるのにわ
(Public, Arts and Research Kitchen)

詳細は[こちら](#)



【次回開催】

②「会う」(新しい知識や技術と出会うトーク&ワークショップ)

「大地をたがやす芸術実践」

11月23日(水・祝) 13:00-17:00 [予定] (要申込、先着順)

講師: 奥脇嵩大(青森県立美術館学芸員)、服部浩之(インディベンディング・キュレーター)、野ざらし[青木杉(インディベンディング・キュレーター)、一般社団法人藝と)、佐藤研吾(建築家)、中島晴氏(アーティスト)] 主催: 秋田市 企画・制作: NPO法人アーツセンターあきた(芦立さやか、藤本悠里子)

秋田の食材が世界各地の料理に変身

写真：大森克己



PARK | いきるところのにわ

美郷町にて学び舎・やぶ前を運営するわいないきょうこさんを迎えて、秋田の食材を味わうワークショップを開催しました。文化創造館の庭にてテーブルとイスをだし、屋外で料理の伝授、食事会を行いました。晴れ渡った青い空がこの日のイベントのためにあるように思えました。



a

●ガスパッショ（スペイン）

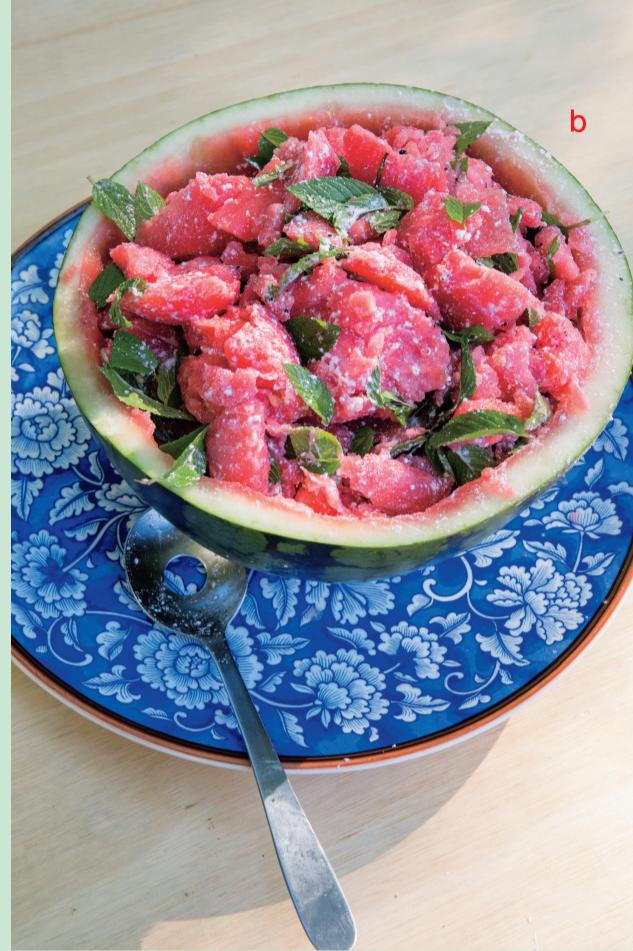
トマトときゅうり、玉ねぎ、ニンニクをすりつぶした冷製スープ。野菜をすりおろしてつくるので、シャキシャキ感があります。トマトやきゅうりが嫌いなひとでも食べられてしまうスープ。a

●すいかのサラダ（エジプト）

スイカをスプーンでくり抜いて、ミント、カッテージチーズ、ブラックペッパーを混ぜて完成。スッキリ爽快で暑い夏を涼しくしてくれるサラダ。b

●かぼちゃの花のフリット（イタリア）

かぼちゃの花にとろけるチーズとアンチョビを詰めて米粉で揚げます。ほんのりカボチャの味を感じた後のチーズがとっても合う。かぼちゃの花が食べられるなんて知りませんでした。c



●肉厚いいたけ生のガーリックバターのカナッペ（A la Yabumae）
ローストしてほっくりと柔らかくなったニンニクを軽くトーストしたカンパニーニュにすりつけてあります。肉厚の香り高いいたけにとびきりのオリーブオイルを。d

●すいかジュースのパンチ（A la Yabumae）

すいかのサラダで残った果汁にアツメクサのシロップとソーダを混ぜたジュース。ミントをのせて。e

●ルバーブクランブル（イギリス）

ルバーブを砂糖につけて一晩、ほろほろにしたバターと小麦粉を合わせたものを乗せてオーブンで焼きます。食べるときはお手製のヨーグルトを添えて。野菜が甘くとろろに。f



生産者さんと共に

使用的な食材は、やぶ前のメンバーが生産者を訪ねて調査しました。ご提供いただいたのは・カンパニーユ「薪窯ベーカー Kabocha」藤原暁峰さん・きゅうり「たかはし農舎」高橋洋生さん・小玉すいか「野菜農家ひらもと」平元沙恵子さん・トマト「すまっこふあーむ梅川農園」梅川尚季さん・でかいすいか「高橋良昭さん・にんにく「小野拓人さん・肉厚いいたけ「柿崎文夫さん・ルバーブジェニファームさん・かぼちゃのはなし室谷栄進さん・とびきりおいしいパンときのこと野菜をありがとうございます。



わいないきょうこ（デザイナー、「やぶ前」）
横浜市生まれ。バッグデザイナーとして活動後、拠点をロンドンに移す。企業やデザイナーとのコラボレーションを通じ、バッグを主軸にファッショントレーニング・インテリア・オブジェなどを制作。舞台、映画のコストumesデザインも担当。現在はフーテン王立タラヤナ財団クリエイティファードバイヤーなど統合ながら、母方のルーツ秋田美郷町に移り、町の伝統工芸品を世界の暮らしに伝えるための町の学び舎「やぶ前」を始めた。

ローカルなフード（風土）を味わう

日時：2022年7月31日(日) 13:00-17:00

会場：スタジオB（第1部）、屋外エリア（第2部）

②「出会う」第1回として、「ローカルなフード（風土）を味わう」を開催しました。第1部「食から考えよう秋田の未来」では、京都大学の秋津元輝教授による「食」を起点に未来・環境・社会について考えるレクチャーと、美郷町で学び舎「やぶ前」を運営するわいないきょうこさんとの対談を行いました。第2部「とれたての夏野菜をさらに特別おいしくする魔法伝授します!!」では、わいないきょうこさんによる秋田の食材を使った調理と食事会を行いました。



第1部「食から考えよう秋田の未来」

第2部「とれたての夏野菜をさらに特別おいしくする魔法伝授します!!」

詳細レポートはこちら

ほんの600メートルほどの距離を、 2時間かけて。～秋田の夏～

ほんとにひょんなご縁から今年、竿燈会のお囃子に加えていただけたことになったのです。

まだ一度も竿燈祭りを観られたことがない私なんかがいいのかな、と躊躇する気持ちも少しありつつも、人情厚くあたたかい方たちのお誘いに、思い切って飛び込んでみました。

経験不足と練習不足で、ただただついていくのに必要な状態のままあつという間に終わってしまいましたが、夕風が吹き渡る竿燈大通りの真ん中にたたずみ、238もの竿燈が一齊に立ち上がり空を染めていく光景を観られたことは、今思い出しても鳥肌が立つほどです。

「川反五丁目竿燈会」は、秋田市唯一の繁華街・川反（かわばた）の片隅にある南東稻荷神社を拠点にした、結成61年の比較的若い竿燈会です。古くは側を流れる旭川から荷揚げされる米などを納める蔵の町だったそうですが、明治時代、俵屋火事という大火をきっかけに料理屋の立ち並ぶ街へ変わりました。「昭和拾一年拾一月奉納」と記された、境内のかわいい狐さんの

奉納名簿を見ると、芸妓さんと思しき名前がずらりと並び、さぞ華やかな街だったろうと思いを馳せることができます。

そんな夜の街川反は、言うまでもなくコロナの影響を厳しく受け、川五竿燈会も存続そのものが危ぶまれるほどの状況だったそうです。企業スポンサーがどんどん支えてくれる大きな竿燈会とは違い、川反のお店一軒一軒の寄付によって成り立っているからです。だからこそ今年の大若一竿が上げられることは街にとって大切なことで、そのことへの感謝と安堵を代表が稽古のたびにお話されていたのが印象的でした。

竿燈大通りでの演技を終えた後の戻り竿燈では、花代を寄せたお店の前で竿を上げながらお稲荷さんに戻ります。ほんの600メートルほどの距離を、2時間かけて。

秋田に移り住んで丸2年。祭りが戻ってきたことの喜びに間近で触れ、ようやく初めて「秋田の夏」を知りました。

文：前田優子（当館コーディネーター）



「育む」 メンバー 募集中！

③「育む」（秋田で暮らす人々が手を動かしつくることを実践する場）では、集まったメンバーと共に、秋田市文化創造館の敷地内で野菜栽培や観察をします。土作りにこだわった野菜栽培を実践する秋田市柳田の「ガイアガーデン」さんの指導を受けながら、種苗の植え付けから収穫、加工、実食、日々の観察に取り組みます。専門家を招いたレクチャーや気になるテーマについて話し合う場もひらきます。参加費は無料です。

【申し込み方法】
参加をご希望の方は
お電話（018-893-6424）か
下記フォームにて
お申し込みください。



写真提供：川反五丁目竿燈会

誰かと一緒に生きていくための表現 映画『沈没家族』上映&トーク

1990年代半ばの東京で実践された共同保育の試み「沈没家族」で育ち、その試みと母親である穂子さんを振り返るドキュメンタリー映画を監督した加納土さん。ユニークな方法で他者と関わることを「アート」と捉え、音楽や言葉を手立てに、全国の市街地、福祉施設、学校、復興団地などで文化活動を手掛けってきたアサダワタルさんをゲストに迎え、映画『沈没家族』の上映とトークを行いました。

『沈没家族 劇場版』
[2018年／日本／カラー／93分]
監督・撮影・編集：加納土

日時：7月9日(土) 13:00-17:30

会場：2階スタジオA1



詳細レポートはこちら

加納土さん、 アサダワタルさんトーク(抄)

Q：「女性はこうあるべき」「家族はこうあるべき」という規範が強く、地域の寛容性が低いと、若者が外に出ていく傾向にあるという記事を読みました。生活を開くことと寛容性の両立、どうお考えですか？

加納：答えになるかわからないのですが…。映画を見たお客様から、「昔の日本は長屋があって、地域みんなで子どもを見ていたのに、沈没家族は一緒に見えるね」と言われることが多いです。でも、穂子さんは「沈没」は長屋とは違うと言っているし、僕もそう思います。その土地に住んでいることで強制的に出てくる関係性の中で助け合えることは最高ですが、同時にそこに縛られることもありますよね。「沈没」の場合は、東中野の周りに住んでいる人たちが来ているわけではなくて、遠いところからでも能動的に集まるという関係性だったので、地縁とは違うと思っています。穂子さんは今も八丈島で、「沈没」とあまり変わらないことをやっています。穂子さんだけのパワーとは言いたくありませんが、でもやはり彼女の周りを巻き込む力、彼女が自分自身を開くからこそ、周りが関わっていける、という点は大きいと思います。

アサダ：僕が「住み開き」の本を書いた時、「これらは長屋ではない」ということを言いたかった。近所の人もいるけれど、それ以外のいろいろな人が混ざり合う場所を作ることはとても大事だと思っています。自分の地域だけではしんどい時に、逃げ場のように入っていく場所。特に文化的な拠点は、例えば秋田市文化創造館のような公共的な場所でも、個人が自主的に運営



写真：伊藤靖史 (Creative Peg Works)



している場所でも、映画館やライブラリーストアでも、単純にエンターテインメントとしてそのジャンルが好きなことに加えて人間関係の逃避場にもなっていると思います。今日のようなイベントも、価値観を共有できそうな人と繋がれる場

かのう・つち
1994年生まれ。1歳～8歳の間を東京で母、加納穂子がはじめた共同保育の試み「沈没家族」のもとで過ごす。8歳からは母親と二人で八丈島に移住。その後、武蔵大学社会学部の卒業制作として「変な家族」で育った自らのルーツを探るドキュメンタリー『沈没家族』を制作。2019年、卒業制作を劇場公開用に再編集し全国の映画館で公開。2020年、書籍『沈没家族 子育て、無限大』(筑摩書房)刊行。

あさだ・わたる
1979年生まれ。これまでにない不思議なやり方で他者と関わることを「アート」と捉え、音楽や言葉を手立てに、全国の市街地、福祉施設、学校、復興団地でプロジェクトを行う。2009年、自宅を他者にゆるやかに聞くムーブメント「住み開き」を提唱。著書に『住み開き増補版』(ちくま文庫)、「ホカソと家族」(平凡社)、「想起の音楽」(水曜社) CDに「福島ソングスケイプ」(Granny Rideto)など。2022年、近畿大学芸文芸学部教員。博士(学術)。



身近な道具を改造した自作楽器を組み合わせてパフォーマンス！愛知県芸術劇場で行われたサウンドパフォーマンス・プラットフォーム2018でのワンシーン。写真：羽島直志、2018



コロナ禍には耳型マイク装置・ミミックロfonシリーズを制作した！オンライン配信や収録におけるマイキングの重要性に着目。写真：mizutama、2022



此花住吉商店街の天井スピーカーを借りて滑琴の演走（えんそう）！聞きなれない轟音に、買い物帰りのお母さんたちも気になる様子。写真：金田金太郎、2019

文：おおしまたくろう

おおしま・たくろう

PLAY A DAYをテーマに、身近な道具を改造した楽器の制作と、それを組み合わせた少し不思議なパフォーマンスを行なう。音楽や楽器の名を借りた遊びやユーモアによって社会の不寛容さをマッサージする。第23回学生CGコンテスト：アート部門優秀賞(2018)、2019年度創造活動助成 for U30採択(2019)、The Medium Is The Message LIVE!!!! (DOMMUNE、2017)、サウンドパフォーマンス・プラットフォーム2018 (愛知県芸術劇場)、Skateboard meets Electronic Guitar おおしまたくろう楽器展 #1 清音（かっくん）(FIGYA、2019)、ホリデーパフォーマンスvol.5: おおしまたくろう (ロームシアター京都、2020)、みなど A GO GO! 2021 (港まちポットラックビル)

●クリエイター・イン・レジデンス2022

パフォーマンスイベント「滑琴狂舞曲 in 秋田！」メンバー募集中

2023年1月15日のパフォーマンスイベントでは、文化創造館内に仮設のパークを設置して、複数のスケーターによる滑琴の演走を行なう予定です。(1月12-14日は設営作業)
【問】秋田市文化創造館 電話：018-893-6424(9:00-21:00/火曜休館) メール：program@akitacc.jp

イメージを巡る「実験」 オンラインレクチャー＆ワークショップ

「イメージ」というとどんなことを思い浮かべますか？

未来の生活を考えるスクール第8回では、ダンサーの手塚夏子氏を招聘して、タイトル通りオンラインレクチャー＆ワークショップを実施。6人の受講者がイメージをテーマに「実験」作りに臨みました。

「実験」では、まず本人が興味を持っていること、疑問に思っていること、知りたいことなどを他の参加者と共に経験できる何かに置き換え、共に検証します。次にそこで感じたことを全員でシェアして、感じ方や考え方の違いはそのままに、意見交換を行います。このように書くと難しいですが、例えば受講者の一人は「自分が姿を見せて歌った時と、姿を見せず歌ったときに聞こえ方/感じ方の違いはあるか？」という「実験」を発表、全員で意見交換を行いました。今回はイメージから派生して「自分がどう見られているか？」ということから生まれた「実験」が多かったように思います。

私たちは社会や自身が作ったイメージに囚われているとも言えるでしょう。今回の「実験」ではそのことが改めて顕在化したように思います。「実験」とはある意味、実生活を生きるためにデモンストレーションの場です。社会の規範やルール、さまざまな物差しを「振付」とした時、それから逃れるためのダンスに手塚さんは取り組んでいるとも言えるかもしれません。今後も継続してこのような「実験」を繰り返すことにより、私たち自身がさまざまな「振付」から脱して、それぞれのダンスを発見できたらと思います。そんな小さな踊りの萌芽、小さな抵抗を垣間見たようなワークショップでした。

文：島崇 (当館コーディネーター)

「実験」の発表会
日時：8月21日(日) 13:00-17:00
会場：2階スタジオA1



てづか・なつこ

横浜市生まれ。1996年よりマイムからダンスへと移行しつつ、既成のテクニックではないスタイルの試行錯誤をテーマに活動を続ける。2001年より自身の体を観察する『私的解剖実験シリーズ』を始動。体の観察から周囲の観察、社会・世界で起きる様々なことを観察するべく実験的な試みを行なう。2018年、Kyoto Experiment (京都国際芸術祭)においてFloating Bottle Project「点にダイブする」上演。2018年4月からベルリンで活動、現在福岡市在住。



田口召平さんを訪ねて

あなたが山と言うとき、それは私が山と言うときと同じものでしょうか。小学生くらいの頃、そんな心配を始終していましたことがあります。山に限らず他のものについても、詳しく説明して同じかどうかはっきりさせたいけれど、色や形で説明する方法しか思いつかなくて、その色や形を表す言葉さえ同じものを指している保証はありませんでした。そのうちそんな心配は身を潜め、山といえば山しかないと思えるようになっていました。それでも最近やはり、あなたが言う山も、私が言う山も同じはずはないと、それはよろこびのような新たな形として確かにそう思っています。

箕作り職人の田口召平さんは、2月にSPACE LABOでの秋田市リサーチ滞在の機会に初めてご自宅と工房をお訪ねし、雪が溶けたらまたいらっしゃいという言葉に導かれ、9月の滞在制作中に再訪、今回は箕作りの材料となるイタヤカエデの林も案内して頂きました。この時、田口さんが見ていたその林は、私が見ることのできる林とはまるで異なるものでした。辺りの植生を見れば、木の柔らかさまで感じることのできる田口さんの広く深い視界を心から尊く思いました。同じように見える木々の連なりからイタヤカエデを教えて頂いた時の、木がイタヤカエデになったあの瞬間の、神経と神経の連結に立ち会ったような鮮やかな感覚。「これでイタヤカエデはわかるようになったね」と言う田口さん。ささやかなことのようでいて、これは壮大なよろこびです。木々の中にイタヤカエデを見つけることができるということ、この木を伐って割って削って削って編んで箕を作ることができるということを描けることは、私が言う山をこれまでよりも多彩なものにさせることを意味しています。文：臼井仁美



写真（上2点）：鄭伽倻 (小宇宙感光)

うすい・ひとみ

1980年東京都生まれ。海洋生物資源科学を専攻した大学を卒業後、東京藝術大学入学。2010年同大学院を修了。作品は主に木を素材とし、先史時代には木器時代があったことを想像しながら、人間の自然への眼差しに焦点をあて思考、制作をしている。物事の成立立ち起源を人間の植物との営みの中に見つけ、対象の分解、見立てや置換によって、国境や世代を超えることのできる解釈を探っている。

●クリエイター・イン・レジデンス2022 展覧会「やまは蔵、まちの原木、ケズリカケの木々」

日時：2022年12月7日(水)-18日(日) 9:00-20:00
会場：秋田市文化創造館 1階コミュニティスペース
作家：臼井仁美 (美術作家)

[まちなか展示も同時開催]

日時：11月23日(水・祝)-12月18日(日)

*会場によって日時が異なります



写真：岩根裕子

あこがれのひと

菅原エイ子さん（永楽食堂 女将さん）

秋田駅から徒歩5分のところに「永楽食堂」があります。県内外からのお客さんが狭い店内で、リラックスして日本酒と料理を大きいに楽しんでいる、いわば秋田のアンテナショップ。いつも楽しそうなお母さん（73）に、今日は根掘り葉掘りうかがいました。



● 日本酒の管理は60歳から
私が酒の管理をしています。多くが、新政さん
が5時半。娘も開店準備を手伝います。旦那は
なくなつた。来年で17年。飲む人ですね。帰つ
たら、ベッドから落ちて倒れていた。脳梗塞。
65歳手前でした。スポーツが好きで、冬場はス
キ。小さい頃は子どもたちと田沢湖に、田沢
湖が満杯だと零石に、朝着替えて待つてなさ
いよ~つて。

写真・大森克己
聞き手・熊谷新子（当館スタッフ）

● 永楽食堂
秋田市中通4-11-10 TEL 018-833-1473
16:30~24:00 (LO.23:30)
予約可・日祝休



インタビューの全貌はこちる

すべての人に場を開く

文化創造館の基本理念には「すべての人に場を開く」という一節があり、指定管理者である私たちはそれを実践しようと試行錯誤している。6月頃から注目されているスケボーの事例は、その一つである。公共の場で禁止されることの多いスケボーだが、文化創造館では利用を禁じていない。実は、これまでに2度禁止しようとしたことがあったが、その時に思い止まらせたのは「すべての人に場を開く」とした理念であり、「文化創造」というミッションであった。

旧県立美術館から文化創造館に改築される際に、敷地を取り囲む柵が取り払われた。柵の向こうには、多様な人が行き来するまちがある。まちと地続きとなった文化創造館は、しかるに種々な人々が入り混じることを受入れ、その混合や交流の中から未来の文化を創造していく。「何かを禁止するということは、それに類する、連鎖する、あらゆる可能性を抑圧するということ」と、藤館長は指摘する。そして、何かを禁止するということは、誰かに対して場を閉じるということもある。だからこそ、スケボーがうるさく、危ない感じる人がいるのであれば、その声も排除しないし実害があれば対策を検討して講じることも私たちの責務である。

この数ヵ月頭を悩ませているのは、すべての人に場を開くときに必要なルールとは一体何なのかということ。スケボーに関しては市役所と協議し、警察に道交法の解釈を尋ね、弁護士に法律相談もしたが、本当に探るべきは明文化されたルールではなく、まちを形成する多様な人々の体験共有や対話から生まれ出されるエンパシー（共感）ではないだろうか。それをどうやって紡いでいくかが、これから文化創造館に問われているし、文化創造館を取り囲むまちに対しても同様に問われているのではないだろうか。あなたの考えを聞かせてください。

文：三富章恵（当館指定管理：アーツセンターあきた事務局長）



※ご意見はこちるまで。いただいたご意見は
ウェブ等で公開させていただくことがあります。

*senryu
Terrasse*
センシューテラス
営業時間 11:00~17:00



センシュードーナツが好きだ。優しい味で、夕方によく食べてはホッとしている。限定メニューが出たら2回は食べたい。でも「ドーナツ＆デリBOX」の存在は知りつつ、ドーナツはおやつなので…とスルーしてきた。実際に食べてみたら、おやつだったことを忘れるくらいすっかりお食事系ドーナツだった。センシュードーナツの新しい顔を知ってしまった。もっと好きになってしまった。ドーナツはおやつのみなさんもぜひ。写真・文：伊藤恵（当館スタッフ）

カタルバー店主 募集中



誰かと語り合うだけのバーです。ゆるやかに語り合える場、「やってみたいこと」を試してみる場、そして開いています。毎月5のつく日は、文化創造館のスタッフが店主。市民のみなさまからも「1日店主」を募集しています。偶然出会った人と話してみたい方、小さい規模で企画を試したい方、ただカウンターの中に立ってみたい方など、お気軽にお問い合わせください。

[問] 秋田市文化創造館
電話：018-893-6424 (9:00~21:00 / 火曜休館)

メール：program@akitacc.jp

館内ガイド＆利用方法

秋田市文化創造館の各施設は、1時間単位での専有利用が可能ですが（有料）。使い方のご相談にあります。ご利用に関する詳細については総合受付で配布しております「ご利用ガイド」をご覧ください。

お問合せ：018-893-5656

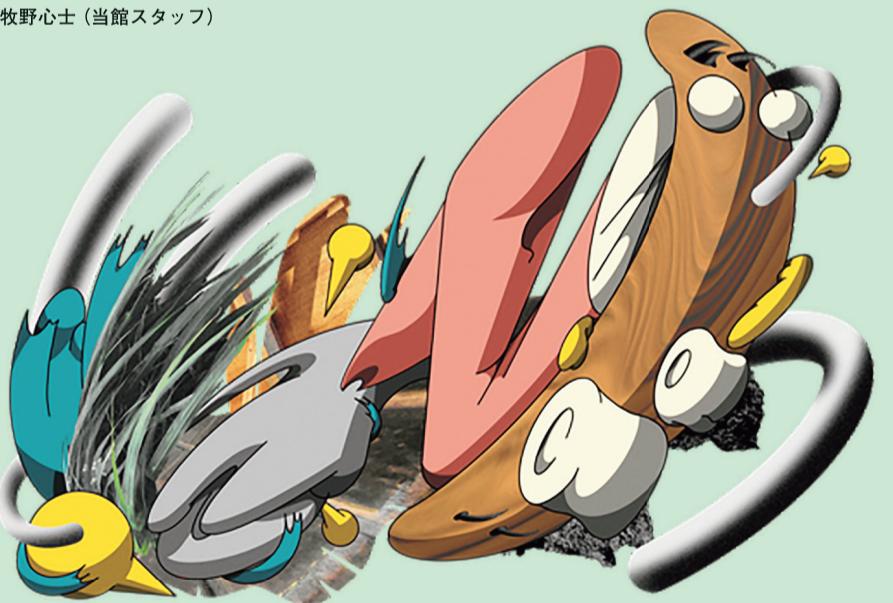


ウェブサイトでもご覧いただけます。

デザイン：服部一成 編集：熊谷新子



絵：牧野心士（当館スタッフ）



10年越しの近藤さん（とKIITO）

今年開館10周年を迎えたデザイン・クリエイティビセンター神戸（KIITO）。開館当初から、私はKIITOと関わりがある。「EARTH MANUAL PROJECT」というアジアの防災活動を紹介する展覧会に、当時駐在していたフィリピンから何組かの作家が参加するため、調査や交渉に協力をしたのだ。その展覧会を担当していたのが、今もKIITOで働く近藤健史さんだ。

昨年9月、秋田市文化創造館はKIITOと連携の覚書を締結した。覚書締結を担当したのも近藤さんだ。10年前も今も、Kenji Kondoというメールアドレスと度々となく交信しながら、私は近藤さんと一度も電話で話したこと、会ったこともないのだった。まるで文通相手のように、何十通ものメールを交わしても、近藤さんが一体どういう風貌で、どういう声で、何を考えて熱心に仕事をしているか知らぬまま10年が過ぎた。

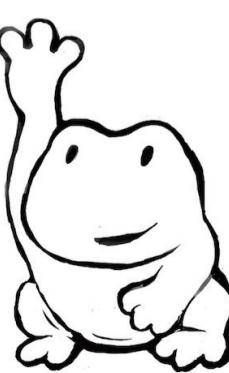
そして今年6月、近藤さんが来秋した。文化創造館視察のため、KIITOスタッフと一緒に。実物の近藤さんは、チェックのシャツと白いスニーカーが似合う港町神戸らしい爽やかさを湛えたお兄さんだった。展覧会制作や公共施設の指定管理等、お互いに別々の土地で似た経験を10年間積み重ねただけに話は尽きなかった。

近藤さんとの別れ際、まだ一度も行ったことのないKIITO訪問を誓い、その約2ヶ月後に強行した。近藤さんははじめスタッフの方々に館内の隅々を案内いただき、幾度となく写真で見ていた外観や内装の細切れの平面のイメージがようやく立体として知覚できた。スタッフの働き方や事業の企画、事業評価や行政に対する説明方法、活動が地元の人々にどう受け止められているのかなどみっちりと情報交換をした。10年越しに近藤さんとKIITOに対峙して思ったのは、10年待った甲斐があったということ。文化創造館の先を行く先輩に羨望のまなざしを向けるだけではなく、何を学び、そして何をこちらから提供できるか、頼れる後輩となるための準備期間として私には10年必要だったのだ。

写真・文：三富章恵



かえるくんの感動
かえるくんは感動すると、手のひらがペトペトしてくる。先日も、ふと聞こえてきた歌声がかかるくんの肌に染み込み、ものすごくベトベトしてきた。やばかった。友達は感動すると鳥肌がたつらしい。関西ではサブイボが出る？ 体の中が熱くなる友達もいる。心臓がドキドキしたり、血液がドクンドクンする人もいる。感動の種類によって、体の反応する部分が変わるのかもしれないなあ。お腹がズシンとする人もいる？ 泪が流れる人は多いと思う。あ、僕も涙目になる。感動するのって理由はない。感じるのだから仕方ない。体のどこかが反応する。震え始める。心が震える。あ、心ってどこにあるのだろう？ かえるくんの心は手のひらにあるのかな。



文・かえるくん
(館長代理)

絵・藤浩志